

用いてインプラントを行った概要について報告した。

### 19. インプラントを応用した下顎総義歯の2症例

萩原 力 (オギハラ歯科クリニック)

無歯顎の患者に補綴物を装着する場合、吸着面積が広い上顎よりもその面積が狭い下顎に行う方が困難とされている。特に歯槽骨の吸収が進んだ症例では義歯調製は著しく困難となる。最近このような症例に対し歯槽骨形成手術に換ってインプラント手術が施されることが多くなって来ている。

このたび歯槽骨の吸収が進んだ症例に対して行った骨膜下法の1例と、骨内法の1例のインプラント手術を紹介した。

### 20. 舌癌切除後の再建法と術後構音機能

小村 健, 武宮三三, 嶋田文之  
(千葉県がんセンター頭頸科)

舌癌切除・再建後に語明度検査を施行した35例の構音機能分析から、障害の少ない再建法として以下の結論を得た。1) 一部舌根を舌半切例では残存舌運動を障害しないDPあるいは前腕皮弁を利用する。2) 舌根を含む舌半切以上例ではvolumeのある筋皮弁を用いる。3) 舌尖への皮弁縫着を避ける。4) 中咽頭合併切除例では口峽部を狭く再建する。5) 舌亜全摘以上の切除例には喉頭挙上術を併施する。

### 21. 左側中顔面欠損による代償性発音運動の観察

尹 錫哲, 翠川鎮生, 齋 前沢  
木村孝雪 (千大)

左上顎悪性腫瘍により、軟口蓋、舌を残して、広範な中顔面の欠損後の発音運動を観察したので報告する。母音の障害は、欠損による共鳴腔の違いにより「i」と「e」と「o」に至みが見られ、それに左右されにくい「a」と「u」では明瞭であった。子音の障害は、本来両唇、歯牙、歯茎、硬口蓋部で行う構音は不能で、軟口蓋と咽頭周囲とによる発音に代償、置換されていた。即ち破裂音「p」, 「t」音は「k」音に、摩擦音「s」音は「h」音に転化した。その中でも母音に至みのある子音には母音と同様の至みが見られた。

### 22. Pycnodysostosis の1例

和田敏亮, 北村完二\*, 平 博彦\*  
村瀬博文\*, 富田喜内\*, 松崎引明  
道谷 引之, 山下 徹郎, 金沢 正昭  
(東日本学歯大・歯・1口外, 2口外\*)

Pycnodysostosis は、小人症、指趾末節の短縮、骨格

系の奇形と骨硬化像などを伴う遺伝性の骨系統疾患である。このたび演者らは歯牙の自然脱落及び抜歯後、その部分に腐骨を形成し、長期間を経過してもなお、腐骨の分離をみないため、その処置に苦慮している本症の1例を経験したので、その概要を報告した。

### 23. 混合歯列期女児に多発した濾胞性歯嚢胞 (基底細胞母斑症候群) の1例

細野隆也, 森川裕一, 林 逸子  
高橋喜久雄 (千大)

患者は9歳2か月女児。主訴、 $\overline{IM}$ 部歯肉の軽度疼痛。顔貌所見は両眼隔離、前頭・側頭骨突出、口腔所見は、多発性顎嚢胞、高口蓋、骨格系統では小脳テント縁の石灰化、脳室・ベルガ腔の拡大とそれに軽度の椎骨側彎の傾向、皮膚所見において手掌・足底のPitsを認めた。

本症候群の主要症状の1つである基底細胞母斑は認めぬものの、以上の特有な症状を合併しているため、われわれは本症を基底細胞母斑症候群と診断した。

### 24. 舌下面に生じたリンパ上皮性嚢胞の2例

日暮寛之, 増子善太, 市川恵子  
高原利幸 (千大)

我々は、舌下部に発生したリンパ上皮性嚢胞と思われる2例を経験した。

第1症例は、41歳女性、舌小帯基底正中よりやや右側に、小豆大の腫瘍を認めた。

第2症例は、55歳女性、舌小帯付着部、両側に右側半小豆大、左側米粒大の腫瘍を認めた。両症例とも、表面粘膜は、正常で弾性硬、周囲組織との境界は明瞭であった。局麻下に腫瘍を摘出したところ、組織学的には、2症例ともに、リンパ上皮性嚢胞と診断した。

### 25. 顎関節強直症の1例

田中治男, 牛久保佳郎, 白野隆史  
秋山正利, 風間敏禎, 山野井弘充  
高山泰男, 工藤逸郎  
(日大・歯・口外1)

顎関節強直症の一治験例を報告する。患者は43歳の女性で、生後まもなく右側頬部に癭が生じ切開処置を受けたが、その後、徐々に開口障害が出現し、昭和39年、20歳時に当科にて右側顎関節授動術を受けた。開口量は25mmと増加したが、4年後、関節痛、外耳道からの排膿のため中間挿入物として使用したポリエチレンの摘出術